

## 〈はじめに〉 ともに明日の実践を創りましょう！

「最近、『塚田先生と走る』と言って、楽しそうにスクールバスに乗っていきます」。

和司くん（仮名）は、自分の思いを伝えることが苦手な子でした。授業中、何か言いたそうに私を見た後、下を向き、指の皮をむきます。「どうすれば自分の思いを伝えてくれるのだろうか？」とあれこれと考え、関わりますが、なかなか口を開いてくれません。

朝のランニングでは、一人トボトボと歩いていきます。私は「走らせたい」と思い、背中を押したり、手を引いたり、「1、2」と言葉をかけたりしましたが、頑として走りません。

どうしたらいいのだろうか…。何かヒントを得たくて、先輩に相談したり、本を読んだりしました。そんなとき、同僚の一人が「歩くことで、走りたくない！って言ってるんじゃないの？」と言ってくれました。

下を向く、指の皮をむく、トボトボ歩く…。こうした行動は、和司くんの立派な「言葉」だったのだと、そのとき初めて考えることができました。それ以来、私は、ランニングのときに「走らせる」ことは止め、「暑いね」「こっちのコースを歩いてみようか」など、ゆったりと語りかけるようになりました。冒頭の文章は、そんな関わりをして一カ月ほどしたときに、お母さんが連絡帳に書いてくれたものです。

本書は、「子どもの発達や生活を捉えた授業をしたい」「子どもの思いやねがいを受けとめ、じっくりと関わりたい」などと考え、日々、四苦八苦している3名が自分なりの言葉で実践やこれまでの経験を書きました。古澤さんは、子どもがなぜ一つの物を手放さないのかを考え、その子の本当のねがいを探りながら関わってきた実践を書きました。塚田は、子どもの要求を一つひとつくみとりながら、その子の発達に合わせた遊びを模索し続けた実践を書きました。石田さんは、初めて経験する障害児学校という現場にとまどいながらも、先輩や子どもたちから学び、実践家として歩んできた道のりを書きました。

最後は、三木裕和さんが障害児教育の歴史を踏まえ、これからの障害児教育で大切にしたいことを提起しています。

日々の実践は、「偉人」や「名人」が行う特別な営みではありません。誰かの指示や特定の方法に従って行うことでもありません。また、実践に「正答」などありません。

この本は、多忙化する実践現場で、さまざまなしんどさを抱えながらも、子どもにも向き合い、自分自身に叱咤激励をし、仲間と手を取り合って学校をつくっている「あなた」に向けてつくりました。学校にいるたくさんの「和司くん」のために、ともに明日の実践を創っていきましょう！